

はじめに

保健環境研究所がスタートしてはや2年が経過しましたが、この間に当研究所を見学された方々も18,000人にのぼりました。特に平成10年度は、秋篠宮殿下・妃殿下が（社）日本動物園水族館協会主催の「第43回水族館技術者研究会」へのご出席に合わせて当研究所にもお立ち寄りになり、まもる一む福岡（保健環境学習室）をはじめ、施設や業務内容を興味深くご覧になりました。

さて、医学の進歩や衛生水準の向上等により、感染症の脅威は一見希薄化したかのごとき印象を与えるまでに至りました。しかし、新興感染症や再興感染症の出現によって新たな脅威が増大し、「我々は、今や地球規模で感染症による危機に瀕している。もはやどの国も安全ではない」というWHOの警告が身近なものとなってきております。このような中、従来の「伝染病予防法」が見直され、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」が新たに施行されました。新法に基づく諸施策の推進に伴い、研究所はその位置づけや業務にますます重要性が増してきているところです。

平成10年7月に和歌山県で砒素カレー事件が発生したのを契機に、本市でも保健所・警察署・消防署等関係機関からなる「健康危機管理連絡協議会」を設置し緊急連絡網を整備したところです。当研究所としてはこのような毒物による中毒事例に的確・迅速に対応できるよう検査体制の整備を行ってまいりました。また、新たに設定される残留農薬や動物用医薬品の迅速スクリーニング法の開発にも意を注いでまいりました。

ダイオキシンや環境ホルモンが大きな社会問題となってまいりましたが、環境や食品中のこれら化合物の分析技術の習得に努めると同時に、魚類を用いてこれらの蓄積性等についての研究に着手しているところです。その他身近な環境である博多湾の赤潮発生に関して、栄養塩である窒素・リンの底質からの溶出に関する基礎研究を行ってまいりましたが、得られた知見をもとに今後は、赤潮対策の一環として底生生物による底質の改善に関する研究にも本格的に取り組みたいと考えております。

この所報は、福岡市保健環境研究所の業務内容を関係機関はもとより広く福岡市民をはじめ全国の方々に情報として提供し、利用していただくことを目的に取りまとめたものです。忌憚のないご批判をいただければ幸いに存じます。

平成11年7月

福岡市保健環境研究所
所長 大田 耿 三

秋篠宮殿下・妃殿下福岡市保健環境研究所御成の様子

(平成11年3月2日)



カブトガニの剥製を手にとってご覧になる殿下・妃殿下



保健環境研究所内をご案内



試験室で熱心に話を聞かれる殿下・妃殿下